

わたしの震災体験記



水道施設が被災したため、給水車から給水を受ける住民（下榎地区）

震災を体験された町民、ボランティアほか関係の方々のなかから、記録編集部会で選出した方に体験談をお寄せいただきました。時間的な経過とさまざまな状況の推移のなかで、①地震直後の体験②立ち上がりのきざしのなかでの思い③震災からの復興をめざして、という3つの視点で寄稿いただいたものです。

天災は忘れないうちにやってきた (前黒坂1区自治会長 稲田巧)

ポカポカ陽気の小春日和であった。根雨に向かう車の中で、突然ゴゴと凄まじい地響きと振動。国道が片道陥没し、塔の峰から砂煙が上がった。樹木が大きく揺れ倒れた。「たいへんだ、地震だ。」突然にやってきた未曾有の大地震が日野町を襲った。家に連絡がとれない。帰路の途中、岩田地区の上で山崩れ、通行不能。奥日野広域農道を別所から滝山公園内に向かう。落石を取り除きながら15時頃帰宅。家のガラス戸は外れ、壁が落ち、家具は倒れ食器類は散乱し、足の踏み場もない状態。妻は余震におびえながら、一人茫然と立ちすくんでいた。

16時30分頃、黒坂支所から自治会長集合の連絡があり出向いたが、集まったのはほんの数人。日野町としての方針がまだ出ていないので、自治会として自主的に対応してほしいということだった。黒坂全体としての対応を協議し、それに基づいて各自治会で対応することにして別れた。区に帰り、班長を招集し下記事項を決めて各家庭への周知を依頼する。

- ①各班ごとに各家庭の居場所・避難場を連絡すること。
- ②避難所の夜具は持参すること。
- ③夕食は各家で準備し、ライフラインを確認する。(水道破損4件、電話0件、電気の故障2件)
- ④黒坂2区集会所を当分の間、常時開放して区民が自由に利用できる。

23時頃、区内の巡視。全家屋玄関の戸が破損したため施錠もできていない。警察署に保安の要請をしたが、署員が出払っている所以对応できないとのことなので、自治会で自衛することになった。以上が地震発生から24時までのドキュメントである。

平成7年1月の『阪神・淡路大震災』の教訓から、「危機管理」が叫ばれて5年9か月が経った。「天災は忘れた頃にやってくる」という諺があるが、まさに「天災は忘れないうちにやってきた」である。今回は、震度の割にはいろいろな有利な要素が加わって救われた面があるが、今回の地震に遭遇したこの貴重な教訓を、ただラッキーだったで終わりにしてはならない。町長をはじめ行政の管理者は、住民の安全と健康を守るために、最悪のシナリオを想定して、初期対応・復興手順等をシュミレートし、訓練を繰り返して備えることが「危機管理能力の向上」につながると確信する。

恐怖の震災体験 (黒坂 前田操)

昨日と同じ時刻に、米子の某医院に家内を乗せて出かける。最近体調が悪く、今日で5日目の点滴だ。いくぶん良くなってきたようだ。いつもは11時過ぎには終わるのだが、今日はまだ出てこない。ようやく正午過ぎになって出てきた。「きょうは点滴が2時間くらいかかったから」という。帰りに食品を少々買い、宇代上の広場まで帰り、淡日のあたる所で駐車。車内で昼食を取り終えた。時計は午後1時半になっていた。さて帰るかときーを回したとたんに車が激しく上下する。おかしいなと思い見ると、電柱や電線が大きく揺れている。大きな岩がもんどりうって落ち、路面にあたり大きな音を立てている。車をバックしようと後方を見ると、大きな岩が道をふさいでいた。「もうだめだ、岩が当たる」、頭のなかが真っ白になった。時間にして数秒だったろうか、われにかえってあたりを見ると、落石は終わっていた。車はフロント部分がつぶれていて、助手席側のドアもない。まわりには、直径1メートルくらいの岩がごろごろしている。妻は私の問いに「大丈夫」と返事をした。「でもどこから出るの」と聞く。私は「フロントガラスがないから前から出られる」と出ようとするが、二人とも左足がフロント部分に押しえつけられていて抜け出られない。近くの工場から人が出ていたので、妻が「助



周囲の山が地震に揺すられて、道路には大きな岩が落ちてきた（前田さんの被災した現場：溝口町内、県道）

けてえー」と大声で助けを頼んだ。すぐ5、6人が来てくれた。ひとりが妻の足を押さえつけている物に手をかけたが、びくともしないので、他の人に金棒を持ってくるように言った。それを取りに帰った人が戻ってくる間にも余震があり不安だった。金棒でコデるとすぐに足は抜け、負ぶさって工場前まで避難する。私の足もすぐには出ず、二人がかりでようやく抜くことができた。負ぶさって妻のところまで運んでもらい、椅子に座ることができた。崩れた山が正面に見え、山肌には赤土が出ていた。崩れ落ちた岩や土砂が、まるで私の車を避けるように途中で左右に分かれていた。「ああ、助かったんだ」妻の顔を見ると涙が出そうであった。

震災で思ったこと（本郷 松本佐智子）

平成12年10月6日は、私にとって一生忘れられない一日となりました。

地震が起きたとき、私は主人の運転する車の中にいましたが、なにか車がバックしていくような気分になりました。近くの商店に行ってみると、道路には亀裂が入り、柵に置いてあるものが落ちていました。家に帰ろうにも、道路には大きな岩が落ちていて、もうすこしで自宅なのに結局帰ることができず、主人は私たちを親戚に預けて、仕事場に向かいました。私たちが帰宅したのは随分暗くなってからでしたが、あまりにも景色が違っていたので驚きました。ひとりで家にいたおじいちゃんが少しけがをしていましたが、元気だったので安心しました。家の中は足の踏み場もない状態で、子どもたちは泣き出してしまいました。私は何をどうすればよいのかわかりませんでした。この年は、主人が自治会長をしていましたので、役場からひっきりなしに連絡があり、とてもたいへんでした。発生直後から主人は帰ってくることはできませんでしたので、私で大丈夫だろうか、地区の人たちにご迷惑をかけてしまうのではないだろうかと不安でしたが、ご近所の皆さんに助けていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

もうすぐ一年になろうとしています。いまでも、「地震のときはたいへんだったね、お世話になりました。」と言ってくれる方もおられ、恥ずかしくもあり、うれしくもあり、複雑な気持ちです。

私は日野町にきて数年しか経ちませんが、普段から地域の密接な係わり合いがとても大事だと思います。また、あのような非常時だからこそ、よりいっそうの連帯感が必要なのだと痛感しました。

ボランティア活動を通して (日野中学校3年生 上田紀穂)

忘れもしない1年前、鳥取県西部を中心として震度6強の地震が起きました。日野町は大きな被害を受けました。わたしは震災から3日間、家族とともに開発センターで不安な避難生活を送りました。そこには、地震の不安におびえる近所の人たちがたくさん詰めかけていました。少しずつ余震もおさまってきたので、友達と遊んでいたところ、保育所の先生から、「ボランティアをしてみない?」と声をかけられました。「ボランティア?わたしが?…」と思いましたが、時間はあるし、ボランティア活動を知るよい機会だと思って、やってみることに決めました。仲よしの小林紀代花さんも一緒です。10月10日朝、保育所の先生の指示を受け、開発センター2階に食料を運ぶのを手伝いました。それが終わり、ほかに自分たちにできることがないかと考えました。中学校の体育館に避難している方のお世話できることがあるかもしれないと考え、行ってみることにしました。職員室で、「わたしたちにできることはないですか?」と聞くと、「役場に大切な書類を持って行ってくれる?」と頼まれました。途中の道では、ふだん見慣れている日野川の流れも、気のせいかな怒っているようで、気が弱くなっている人を飲み込んでしまいそうな気がしました。用事を済ませ中学校に帰りました。友達と相談して、2階のトイレと体育館を掃除することにしました。体育館トイレは地下で配水管がグチャグチャになり、汚物がきれいに流れず詰まっていました。正直言っていやでした。悪臭や散らかったティッシュペーパー、片付けるのがたいへんでした。でも、掃除していると、避難している人に「ありがとう」と温かい声をかけてもらい、人に喜んでもらえるのって気持ちがいいな—と思いました。翌日からは、塔川さんも加わって、昨日と同じようにトイレ掃除や廊下掃除を本当に一生懸命しました。ボランティアは疲れることも多いけれど、しているうちに楽しくなりいい気持ちになりました。ふだんの生活では、学校の掃除なんて面倒くさくて怠けてしまうこともあります。そんなわたしが、今、ボランティアで頑張っけて掃除をしていることを思うと、なんだか変な感じがします。人のために何かをすることでこんなに自分が変わるもんかなと思いました。

掃除を終えて職員室に行くと、河原中学校や日野中のテニス部と交流のある県外の中学からの寄せ書きや義援金が届いていました。「たいへんだと思うけどがんばって!」「くじけるな!」わたしはうれしくて、うれしくて一つひとつ激励のことばをかみしめながら読みました。たくさんの方の元気をもらった気がしています。

避難している方が寝泊りしておられる体育館の雑巾がけをしました。体育館は広くてとてもたいへんでした。でも、県外のボランティアの人たちが手伝ってくれました。おばあさんたちが、「いつもありがとうね」と言ってくださいました。わたしも笑顔で「はい」と大きな声で答えました。その後も、まるで何かがわたしの背中を押しているように、夢中になってやりました。

わたしは、地震でつらい思いもしたけど、ボランティアをするという機会に出会い、多くの人とふれあい、とてもすばらしい体験ができました。

これからは、わたしにできることがあれば、今回のことを生かしてすすんで何かをしたい、いえ、しなければと思っています。



家屋が被災し、高齢世帯や一人暮らしは大変

高齢者の安否確認を (民生児童委員 田淵武夫 三谷)

当日は、全国介護保険推進サミットに参加していました。会場である米子コンベンションセンターで午後のディスカッションが始まった矢先でした。ぐらぐらと烈しく揺れて、会場内から「地震だ」「地震だ」という声があちらこちらから起きました。私たちはとっさに安全な所に避難しなければと、日野町の参加者全員で屋外に避難しました。その後も余震が続き、なす術もなく様子を見る外ありませんでした。しばらくすると境港方面の被害が甚大だとのうわさが流れて来ました。その後も次々に余震がやってきましたが、日野町は地震に強いとの先入観があり、まだ他人事のような気がしていました。時間の経過と共に我が家が心配になってきました。情報は皆無で電話も不通で連絡の方法もないまま時間は経過し、迎えの車は午後4時ごろに到着、ようやく帰路につきました。その途中、墓地に寄り様子を見ましたが、墓石は全部倒壊して散々たる状態でした。家族は幸い全員無事でした。担当地区の独居高齢者等の安否を早速確認しましたが、全員無事とのこと。家屋の倒壊はなし。しかし、全戸で屋根の棟や壁等の一部を破損していました。

日野民協の谷本会長からの指示で会長宅に集合し、ボランティアの受け入れ体制や独居を始めとする高齢者世帯への対応、委員会のこれからの役割等を確認しました。翌日からボランティアの方々のお世話で屋根のシート張りを実施し、屋根の雨漏りの心配はなくなりました。最初の通達では住居だけとのことでしたが、その後作業が進み、住居以外もシート張りをしていただきました。その後、私も4日間ボランティア活動に従事致しました。対策本部からは次々と通知やお知らせ等が配布されました。住宅復興事業の確認申請など独居高齢者には難しい点もあり、写真や位置図等の添付書類作成のお手伝いを致しました。

盲導犬の受け入れに感謝 (根雨 田淵ひとみ)

今回の震災を振り返ると、避難所の中に盲導犬を受け入れていただいたこととボランティアの援助がとてうれしかったです。他の被災地では、盲導犬が避難所の入り口までしか入れてもらえなかったという話も聞きましたが、日野町では快く受け入れていただきました。また、ボランティアの方には買い物や家の片づけ、そして予定が早まった新病院の開院に向けて、通勤の練習にも付き添っていただきました。町民の方、ボランティアの方、そして行政の方々に感謝申しあげます。

10月6日の午後は休暇で友人と町内のレストランで食事して、ちょうど自宅へ帰ろうとしたときでした。最初は軽震かなと思いましたが、次にぐらぐらっと大きく揺れ、店内のガラスや蛍光灯、食器が割れる音が響きわたりとても怖かったです。店の外に出ると「スーパーの看板が落ちている。」「自動販売機が駐車場に倒れているぞ。」というまわりの人たちの声が聞こえ、とても不安になりました。

その日の朝、なぜかキティ(愛犬)はぐったりして元気がなく、フードは食べないし、水も飲みません。午前中の仕事が終わって帰宅すると、キティは家の中をぐるぐる、そわそわと歩き回っていました。仕方なく、昼は家に残して出かけました。前の日までは普通だったのに、その日はいつもと違って変でした。キティは、その後も余震におびえ、丸くなるが多くなりました。27kgあった体重は、一時期20kgまで落ち込みました。キティのリズムが戻ってきたのは春先の3月ごろからだったと思います。

今回の震災は、昼間で天気がよかったのですが、これが夜中や冬だったらどうなっていたのだろうと思います。震災直後は避難先や連絡先がわからず、とても不安でした。そういう意味で、避難訓練への参加や日ごろから災害時の対応を自分なりに考えておくことが必要だと思いました。

こわかったじしん (根雨小3年生 砂原基)

10月6日1時半に大じしんがおこりました。そのとき、ぼくは教室でほうきをつかってそうじをしていました。きゅうにゆれたので、「じしんだ」と言いました。つくえの下に入りました。先生が、「出ていいです」と言われてからぼくが一番にひなんしました。

ひなんしてからいもうとのくみこのことがしんばいになって、ないてしまいました。いもうとはまだ1さいにもなっていないからです。おねえちゃんもないていました。そのとき、5年生のせたとおるくんが、「しんこきゅうすると、気がらくになるよ。」と言ってくれました。そのとおりしんこきゅうすると、気がらくになりました。

校でいからどしゃくずれが見えました。「ゴゴードドーン」と、すごくでっかい音でした。そうしたら先生がかぞくの人に電話をしてくれました。「ああ、お母さんが生きていてよかった。」くみこも生きていてよかった。もう、じしんはおきてほしくないです。みんながぶじでほんとうによかった。

自分の町は自分で守ろう (日野町消防団長 宮脇光男)

昨年10月6日午後1時30分、鳥取県西部を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、日野町は震度6強により町全体が多大な被害を被りました。これだけの災害にもかかわらずひとりの死者もなく、火災も発生しなかったことは不幸中の幸いでした。

消防団員も被災者のひとりでありましたが、発生直後から、昼夜を問わず献身的に防災活動に従事していただいた団員各位に深く敬意と感謝を申し上げます。

発生5分後には、災害対策本部を設置し、サイレン及び防災無線などにより団員を招集しました。これに呼応して、根雨・黒坂の指定場所に終結した団員は約15名。時間の経過とともに、仕事先から帰って集合してくる団員も増えてきました。第1、第2分団両副分団長指揮のもと初動体制に入りました。住民から次々と情報が寄せられ、真住及び下榎で人的被害の報により、広域消防と連携して両方ともに無事救出することができました。

消防団の使命は、第1が人的災害救助活動、第2が財産保護のための活動です。そのためにも早く確実な情報を収集すること、自主的避難の呼びかけをすることの指示を出し、少ない体制ながら精一杯の努力をしましたが、なにせこれだけの大規模な災害にあつて、住民の皆さんの様々な要請に対し、速やかに且つ十分な対応ができなかったということが残念でなりません。このような状況下では、人的救助を優先せざるを得ません。さらに、団員を効率的に動かすためには、なによりもまず確実な情報が必要となります。

災害が発生したときには、一人ひとりが慌てず、適切な行動を取ることが必要です。そのためにも、日頃から関心を持って正しい心構えを身に付けておくことが必要です。ぜひ家族会議で、家の中ではどこが安全か、幼児やお年寄りの誘導、避難場所と経路の確認、救急品等のチェック、家族間の連絡方法など、時間帯や季節による違いも考えて相談しておいてください。また、「自分の町は自分たちが守る」という意識を持って、住民一人ひとりがきめ細かい活動をすることが重要です。このことが自主防災組織の始まりとなるものです。

近年、社会情勢の変化により、消防団は団員数の不足や高齢化等により活動の支障が出ています。本町でも同様であり、さらに、町外へ通勤する団員が増加したことにより、昼間時の団員数が極めて少ないという状況です。全国的には、女性団員が増加傾向にあり、1万5千人が女性特有のきめ細かさを生かして活躍中です。本町でも女性団員に、自分の町を守る新しい原動力になっていただきたいと願っております。



「早く元気になってね」 気高郡の勝谷小学校5年生が町内の小学生に干羽鶴をプレゼント

子どもたちとともに (根雨保育所長 河平芙美子)

あの未曾有の大地震から一年が経とうとしています。たいへんな状況の中、保護者、地域の皆様と職員が一体となり、子どもたちの命を守ることができたことを、心から感謝しています。

まさに大地震でした。わたしたち職員は、突然地の底から突き上げてくるような激しい揺れ、いつまでも続く余震に、一瞬「何事だ。この世の出来事か」と疑う状況でした。子どもたちは各保育室で昼寝中でした。遊戯室の防煙用ガラスが落下、床に散乱して非常に危険な状態の中、職員は必死で子どもたちを布団ごと机の下に引き入れ、名前を何回も呼び起こし、人員点呼するとともに、不安がる子どもを励ました。地鳴りとともに、何度も起きる余震に子どもたちは、机の下で恐怖におののき、すすり泣く声がしていました。

子どもたちを避難場所にいつ誘導するのか、ずいぶん考えました。園庭は狭く、いろいろな遊具や鉄柱などがあり、タイミングが悪ければ命にかかわると思っていました。一時間ほど過ぎた頃から、多少余震が少なくなったのを見はからって、0、1、2歳児は避難車に乗せ、3、4、5歳児は徒歩で園庭に集まり、日野病院の駐車場に避難しました。その間、病院が停電になったため、電源を確保するため重症患者数名が当所に避難してこられました。地震発生直後から、数人の保護者が駆けつけてくださり、たいへん勇気づけられました。また、避難先では、患者さんや病院職員の皆さんが大勢おられて、「皆と一緒になんだ」という安心感をえました。時間の経過とともに、次々と迎えに来られ、全員無事保護者にお渡しできたとき、「本当にみんな無事でよかった」と、涙が止まりませんでした。少しでも間違えたら何が起きても不思議ではなかった状況でした。

今回の体験から、人間は自然の中で生かされていると実感しました。だからこそ、人間同士の支え合いとつながりが大切だと感じました。21世紀を生き抜く子どもたちが、この体験を忘れることなく、命を尊び、心豊かに人とのつながりを大切に、たくましく成長してほしいと願っています。



町図書館で人形劇を楽しむ子供たち、震災後、さまざまなチャリティーイベントが町内で開かれ、元気づけられた

地震が来た！ (日野病院総婦長 枝原瑞江)

大きな揺れのあと、ただちに看護婦は病室を巡回し、患者さんに声かけと安否確認をおこないました。避難命令が出ると、74名の入院患者さん(独歩35名、護送8名、担送31名)を1階病棟、2階病棟、3階病棟と順次中央階段を伝い、玄関前の駐車場に連れて出ました。歩行可能な患者さんは4～5名ずつ、1本のロープにつかまって避難しました。車椅子の方は、職員が両サイド持ち上げ階段を下ります。担送患者さんは敷布団のまま、職員3～4名で抱えて出ました。長椅子、キャスター付きベッド、布団等を運び出し、患者さんの寝る所を確保しました。各病棟責任者は、最後病室を回り全員の避難を確認しました。このようにして当日勤務の職員、看護婦28名、医師8名事務職ほか47名、総勢81名で避難を完了しました。この間約20分でした。幸い、患者さんの上に物が落ちたり、ベッドから転落した等の事故はありませんでした。点滴や酸素吸入中の患者もありましたが、トラブルもなく避難できました。いったん病院正面玄関の駐車場に出て、根雨社会体育館に移動しました。院内は電灯が大きく揺れていました。

患者さんにとっては、看護婦や職員の励ましは心強いものがあつたのですが、自宅のことはさておいても駆けつけて来られたご家族の顔を見ることは、百倍の勇気が出たことと思います。

その後、電話は鳴りっぱなしでしたが、その対応がスムーズだったとはいえません。日野病院の患者さんは全員無事だということをどのようにしてご家族に伝えられるようにするのか、これが今後のテーマです。

小学校が避難所に (黒坂小学校校長 青戸哲範)

10月6日の鳥取県西部地震は、たいへんな自然災害であり、大きな被害を爪跡として地域に残した。この地域で生活している私たちに様々な影響を与えた。振り返ってみるとき、私は平生の何も感じない当たり前の生活が一番良いのだと思うようになった。

学校で児童生徒を預かるものとして、当日、全員無事に緊急避難できたことが何よりだった。児童全員の下校を見届けた後、この非常事態から学校再開に向けての動きとともに、地域の方々の避難所として学校を使用されることへの対応は、その時その場での判断が優先され、誰かにゆっくりと相談できる余裕はなかった。ときに失礼なことがあつたかもしれないが、お許しいただきたい。

全国ニュースとなり、各地の知り合いからの安否の問い合わせと激励を頂いた。今回の災害を通して、人は多くの人のお世話で生活ができていることを再確認したり、人生には、良いこと悪いこと苦しいこと、そして我慢しなければならないこと等々、多くの出来事があることを知ったり、いろいろな体験を数多くした人ほど生き方に幅ができてくることを改めて知ることができた。地震発生時の天気、季節、時刻、居場所などによって、大きく変わる対応と結果、非常時と平常時の対応の違いも当然あると思う。平常時は管理規則が優先するだろうが、緊急非常時には、現場責任者のその時その場での、冷静で誠意ある、ベターな判断と行動が大切ではないかと思った。もちろん、事後報告と説明の必要がある。このことは勤務時間や勤務内容からは対応できないことでも、人としての生き方の問題で対応できると思った。前例もなく無我夢中でやった現場対応を評価された時、ホッとすると同時に、貴重な体験となった。いっしょに勤務した同僚の、「学校の施設設備は自分たちが一番よく知っているから」と、職場をあげた24時間の協力体制は心強く感じたし、地域の方の役に立つことができ本当によかつたと思っている。

二度の大地震を体験して (黒坂 田代志津子)

わたしは、阪神淡路大地震と鳥取県西部大地震の二回の大震災に遭遇しました。親子ともども無事であったことが何よりだったと思っていますが、なにか運命的なものを感じています。ただ、今でも二人の子どもたちは、なにかの弾みで大きな振動があると、小学校時代に体験した震災の恐怖感が染み付いているのでしょうか、とても神経質になり体中に震えがくるようです。

阪神淡路大地震は、多くの尊い人命を奪いました。今回は負傷された方がありましたが、人命には異常がなく、黒坂では互いに被害を受けながらも助け合いの気持ちのなかで避難生活を送ることができました。これは、日ごろからコミュニティが十分にはかられているからでしょう。ふるさとに帰ってきてからずっと感じていた、田舎ならではの人情味あふれた良さだと思います。黒坂地区の皆さんにとっては、初体験の避難生活だったことなのでしょうが、自分たちの手で炊き出しや生活の支え合いが、何の気取りもなく、平然と行われていました。ですから、私は、阪神大震災のときとはまた違った思いで、人の温もりを強く感じながら、避難所生活第一夜を過ごせたのです。

一夜明けて、それぞれ自宅の被害状況を確認、後片付けなどに励んでいるとき、黒坂の町にはいろいろな人がやってきて、とてもにぎやかでした。報道関係の対応をしている人、後片付けに追われながら、ボランティアの人に感謝しているお年寄りなど、さまざまな光景を、私は、阪神淡路大地震のときとダブらせて見ていました。

心温かく人情味あふれた黒坂の人たちが、外部から入ってきた多くの人の中の、一部の心ない人のために、悲しい目にあわなければ良いがと願いながら、子どもたちとわが家の後片付けに取りかかりました。

ありがたかったファックス情報 (根雨 藤原正治)

10月6日、午前中は畑に行き、昼食後、家で休んでいたら1時半頃、突然のものすごい大きな揺れでびっくりしました。地震が起きたら柱の多くある廊下に逃げると決めていたので、そこに移動し、じっと座っていました。あまりの揺れになかなか歩くこともできず、妻は血圧が上がったような気がしたと言っていました。整理ダンスは揺れのため60センチメートルほど移動しており、2階の洋服ダンスや本棚は倒れてバラバラになりました。阪神大震災で被災した姉からの忠告で、以前から棚等にL型の金具で壁に固定していたので食器棚は無事でした。大きな揺れはおさまりましたが、余震はたびたび続きました。自宅で頑張ってはみましたが、不安がつので避難所に移動して、皆さんと一緒に情報を得たり食事をとったりしました。避難所は一週間くらいかなと思っていたのですが、余震がおさまらず、私たちは夫婦で耳が聞こえないため、とくに夜が不安で、結局10日間いることになりました。その間、東京にいる息子がテレビで私たちを見たときファックスをくれました。その他、日本聴力障害新聞と聴覚障害者専門テレビ放送の取材も受けました。町からは、家屋修復のため補助金をいただきましたし、無線放送が聞こえないかわりにファックスで連絡を下さるようになりました。本当にありがとうございました。